

【事故報告書】

トレイルランニング練習会で発生した遭難事故について

作成日: 2025年12月7日

作成者: 壇 翔太

この度は、2025年5月11日に東京都奥多摩町で私、塙翔太が開催したトレイルランニング練習会において、参加者が遭難され、8月6日にご遺体が発見され、その後のDNA鑑定によりご本人と特定されました。誠に痛ましい事態に直面させてしまい、心より深くお悔やみ申し上げます。

練習会中にこのような事故が発生したことについて、主催者として重く受け止めております。

本報告書は、今回の遭難事故に関する「事実の記録」として、当日の状況とこれまでの捜索活動の経緯をご説明するとともに、当日の時系列と今後の再発防止策、そして再発防止への誓いをお伝えするものです。

ご遺族の皆様には辛い内容かと存じますが、私が現場で見たこと行動したことを含め、お伝えすべきことを可能な限り記述しました。ご一読していただけますよう、お願い申し上げます。

<目次>

1. 概要
2. 事故発生から発見までの経緯
3. 捜索活動について
 - ・通報と初期対応
 - ・捜索体制の経緯
 - ・捜索活動への支援体制
4. GPXデータに基づく状況分析
5. 安全管理体制の課題と再発防止策
6. ご遺族の皆様へ
7. 情報公開について

1.概要

- ・発生日時:2025年5月11日 午後5時頃
- ・参加者:私含む9名(主催1名、参加者8名)
- ・発生エリア: 東京都西多摩郡奥多摩町 花折戸尾根・鳩ノ巣エリア
- ・予定行動時間:8時間程度
- ・発見日時:2025年8月6日

道迷いにより遭難され、長期間にわたる捜索の後、8月6日にご遺体が発見され、DNA鑑定を経てご本人と確認されました。

・装備:本練習会では距離やコースに関わらず下記に記す必携装備を必ず持つよう事前に指示しておりました。

- ・レインジャケット上下(防水加工されたもの)
- ・トレイルランニングシューズ
- ・ヘッドライト(予備電池も必携)
- ・エマージェンシーキット(サバイバルブランケット、絆創膏、テーピング1m以上、消毒液、包帯など)
- ・飲料1L以上
- ・補給食(6時間以上動き続けるための補給食)
- ・コースのGPXデータ(コースは必ずスマホまたは時計にGPXデータをダウンロードしておく。)

2. 事故発生から捜索、発見までの経緯

2-1. 事故当日の状況(2025年5月11日)

- この練習会は、トレイルランニングの経験のある方を対象に、ロングレース完走を目指すアドバンスクラスであり、スピードではなく「ゆっくり動き続ける」ことを主眼としていました。
- コースは、①古里駅をスタートし、②川乗山から③奥多摩駅を経由して、④本仁田山、⑤鳩ノ巣駅、①古里駅へと戻る全長約28kmの行程を設定していました。(地図上の赤矢印のAルート)



(図① 練習会コース全体図)

- 当時は9:00に①古里駅をスタート。②川乗山を経て14:00ごろ③奥多摩駅に到着しました。
- この時点で予定より約30分遅れており、参加者の皆様の間で疲労の度合いに差が見られました。このまま予定通りに④本仁田山に登ると差が開くことが予想されたため、奥多摩駅でコースを変更、短縮することを提案。その後は変更した「ゴンザス尾根～花折戸ルート」を進みました。(地図上の青矢印のBルート)
- このBルートの途中で参加1名が道に迷われました。その経緯について、奥多摩駅でのコース変更の時点から、時系列に沿って詳しく記述します。

- 14:00頃: ③奥多摩駅に予定時刻よりも30分ほど遅延し到着。奥多摩駅でエスケープ出来ることとルートを変更する(A→B)ことを説明し、ゆっくり歩き続けてゴールを目指すと説明しました。
- その後奥多摩駅で新しいBルートのGPXデータを参加者全員に配布し、各自のランニングウォッチに取り込んでいただくよう促しました。その際、全員にデータが正しく取り込まれたかを確認いたしました。
- 遭難された方からは、「データが入ったか分からない」とのご申告があつたため、私が直接、その方のランニングウォッチを目視で確認しました。
その結果、Bルートデータが正常に反映され、ナビゲーション機能が起動していることを確認しております。
- そして、登りが急なことから各自出発前に商店や自販機で補給食の調達、水分の調達を行いました。
- 14:30頃:Bルートを進み、ゴンザス尾根に全員で登り返しました。半分ほど登ったところで遭難された方を含む2人が遅れていたため休憩し、私が最後尾に付きゴンザス尾根を登りました。
- 15:30頃:遭難された方は途中からスピードアップし、私がついていた最後尾グループを抜けて前のグループに追いつき、ゴンザス尾根～花折戸尾根分岐で他参加者と最後尾を待っていました。
- 16:00過ぎ:ゴンザス尾根～花折戸尾根分岐で参加者の人数と体調確認を行った際、最後尾にいた男性が疲労していたため、その男性を先頭に列を作りながら⑤鳩ノ巣駅に下山を開始しました。
私は列を前後しながら、中腹付近で下ってきていた遭難された方と他参加者1名を目視で確認し、前で休憩していたグループに合流しました。
(遭難された方もお互いに位置を確認していました。)
- 16:30頃:花折戸尾根から鳩ノ巣荘への下山口が不明瞭なこともあり、その手前で少し前を進んでいたグループと待機しましたが、遭難された方が現れなかつたため、疲労困憊していた男性と他の参加者を安全にゆっくりと下山させました。
私は単独で同場所で数分待機しましたが、降りてこなかつたため、下山しながら遭難された方に連絡を入れました。
- 16:45: 参加者に状況を説明した後、その場で全員の安全を確保した上で解散としました。荷物の置いてある古里駅まで全員で行き、駅に着いたら連絡をするよう指示しました。
- 16:49: 遭難された方とLINEがつながり、「現在地が分からない」「道がいっぱいある」と伝えられました。
まず現在地を教えて欲しいと伝えると、時計の現在地データ画像で送られてくるが、詳細な場所の特定はできませんでした。
下ってきてしまったとのことだったので、下らないように指示しました。

ナビゲーション機能が作動しているということだったので、時計を見ながら歩いてきた道を戻り登山道に復帰できそうか確認しました。

「わかった、ナビゲーションを見て戻ってみる」と電話を切りました。

- 17:10頃：再度LINE電話が来ました。「周囲は崖になっていて進めない。」という事だったので、歩いてきた道を聞くと「比較的安全で歩きやすい道を歩いてきた」と返答がありました。
ゆっくりでよいので道を戻りながら尾根または登山道に出たら再度連絡するように指示しましたが、17:27に電話を切った後、LINEで「充電が1%」と連絡が入りました。
- 17:30頃：私は下山口から登り返し、送られてきた時計のナビゲーション画像を頼りに花折戸尾根の登山道ではない尾根の下や、トラバースできそうな細いトレイルを進みましたが合流できませんでした。登山道に復帰して登り返しましたが合流する事ができず、最後に目視した地点まで登りましたが少し暗くなりはじめました。登りが苦手なのを把握していた為、ここまで登り返している可能性は少ないないと判断し、ヘッドライトとハンドライトを照らし、花折戸尾根の東側と西側に声掛けしながらゆっくり下りました。
- 18:54頃：参加者の1人から電話があり、まだ見つかっていない旨を説明後、花折戸尾根下山口に車を止めていてくれるということだったので19:30前頃合流しました。
- 19:30頃：最初に迷ったであろう場所から下ると沢を超えて林道西川線（図①練習会コース全体図黄色線部）に出るので、林道西川線を車で行けるところまで搜索。荷物のある古里駅、下山口から近い鳩ノ巣駅を探索するも見つけられませんでした。
- 20:00頃：鳩ノ巣駅交番から青梅警察署に通報し、状況を説明し、詳しい情報を伝えました。
- 21:30頃：山岳救助隊による搜索が開始されました。

2-2. 捜索活動の時系列と発見

- 5月11日 21:30頃：山岳救助隊により、現場での搜索活動が開始されました。
- 5月12日～13日：花折戸尾根の東側を中心に広範囲にわたる搜索が行われました。
- 5月14日：行動軌跡を記録したGPXデータが提供されました。これにより、東側の尾根で一時的に道に迷われた後、一度ルートに復帰されたものの、その後ゴンザス尾根－花折戸尾根分岐方面に登り返している途中に登山道を西側尾根にそれた可能性が高いことが判明しました。
それら先のGPXデータが途切れていた地点周辺で帽子、アームカバー、フラスク（水筒）が発見されました。
※このGPXデータによる軌跡と、行動の分析については「4.GPXデータに基づく状況分析」で画像と共に詳しく記述します。
- 5月15日：発見された携行品とGPXデータに基づき、滑落の可能性を考慮した警察による一斉搜索が実施されましたが、新たな手掛かりは見つかりませんでした。
- 5月16日～20日：ご遺族のご意向を受け、民間救助隊による集中搜索を実施。しかし、発見には至らず一旦搜索活動は停止となりました。
- 5月25日：花折戸尾根の西側尾根にて、遭難された方のものと思われるスマートフォンが発見されました。この重要な手掛かりを受け、その周辺を中心に搜索が続けられました。
- 2025年8月6日：長期にわたる搜索活動の末、ご遺体が発見され、その後のDNA鑑定により身元が確認されました。

3. 捜索活動について

3-1 通報と初期対応

通報後、直ちに警察・山岳救助隊をはじめとする関係機関へ事故の状況を説明しました。そして、当日の行動、やり取りの記録、送られたナビゲーション画像等を警察と共有し、情報提供を行いました。

3-2 捜索体制の経緯

上記の時系列状況に記載の通り、事故発生当夜から警察・山岳救助隊による搜索が開始され、その後、ご家族のご意向を踏まえて民間救助隊を投入しました。さらに、ボランティアの皆様による搜索も続けられました。

※ボランティアの皆様の搜索に関する経緯や情報は、この報告書には記載していません。

3-3 搜索活動への支援体制

長期化する搜索活動を支援し、ご家族の負担を少しでも軽減するため、私は以下の体制を整えました。

1. 任意団体設立と支援金口座の開設

搜索活動を継続的に行うための支援基盤として、6月3日に任意団体「奥多摩搜索支援会」を設立しました。そして8月2日に団体の支援口座を開設し、皆様からのご支援を管理・活用できる体制を整えました。

2. 多角的な視点での搜索の実施

搜索活動は広範囲にわたるエリアや、立ち入ることが難しい急斜面や深い沢なども対象として行われました。ドローンの活用も検討しつつ、基本的には目視による搜索が続けられていました。

3. 民間救助隊への再依頼

山岳遭難搜索において、専門的で高度な知識と経験を持つ民間救助隊の協力は、発見の可能性を高める上で不可欠であると判断し、搜索状況や支援金の状況を見ながら、実績ある民間救助隊に対し、改めて協力を依頼することを検討しておりました。

誠に残念ながら8月6日に搜索は終了しましたが、任意団体を通じて寄せられた支援金に関しては、今まで未使用のまま厳重に管理しております。今後は、ご遺族の皆様のご意向を最優先し、適切に使用させていただく予定です。

4. GPXデータに基づく状況分析

5月14日に提供された、当日の行動を記録したGPXデータをもとに、推測される行動と現地の状況をまとめます。

4-1: GPXデータから判明した行動の概要

提供されたGPXデータが記録されていたエリアは、下図全体図の赤丸部分、花折戸尾根周辺です。



(図② 練習会コース全体図+GPXデータ記録エリア)

そのGPXデータによると、花折戸尾根下山中に迷った後、花折戸尾根登山道に復帰しています。

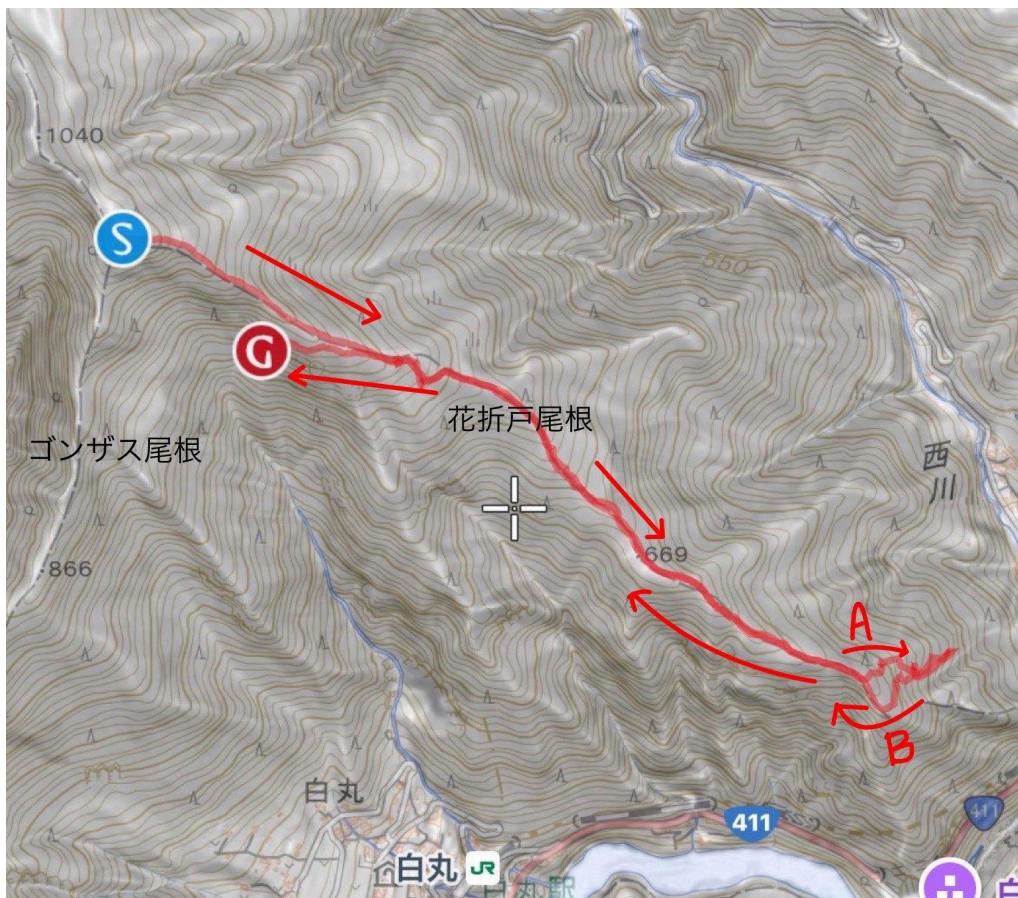
しかしその後、下山方向とは逆のゴンザス尾根-花折戸分岐方向へ登り返していました。

その登り返しの途中で再び登山道を外れ西側の尾根に迷い込み、最終的にGPXデータが途切れたと記録されています。

その記録の詳細を地点ごとに分析しました。

4-2: GPXデータと現地搜索から判明した行動の詳細

提供されたGPXデータ(図②赤丸エリアの行動)を地図上で示すと下図の赤線となります。



(図③ GPXデータ記録全体図:花折戸尾根)

- ・地図上のS地点がゴンザス尾根一花折戸尾根分岐、G地点が最後にGPXデータが途切れた場所となります。
- ・GPXデータによるとS地点から赤矢印のように進んでおり、A地点(下山口まで約600m)で登山道から外れた後、B地点から登山道に復帰し反対方向であるG地点まで約1.4km登り返しています。

4-3:花折戸尾根・道迷い地点 1

- ・図③のA、B地点は下図④の赤丸エリアです。ここが最初の道迷い地点と思われます。



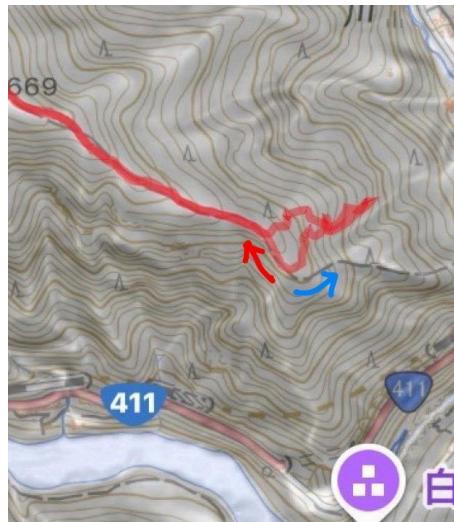
(図④ GPXデータ記録全体図: 花折戸尾根での道迷い地点1)

- ・図④の赤丸部分を拡大したのが下図⑤、そこを捜索した時に撮影した写真が図⑥です。
青矢印が登山道(下山するルート)、赤矢印がGPXで記録された当日進んだと推測されるルートです。登山道を東側にそっています。



(図⑤ 道迷い地点1拡大図-1) (図⑥ その現場写真)

- ・そして花折戸尾根東側に道迷いした後に登山道に戻りましたが、下図⑦⑧のように下山ルートである青矢印とは逆の赤矢印方向に登り返していることが分かりました。



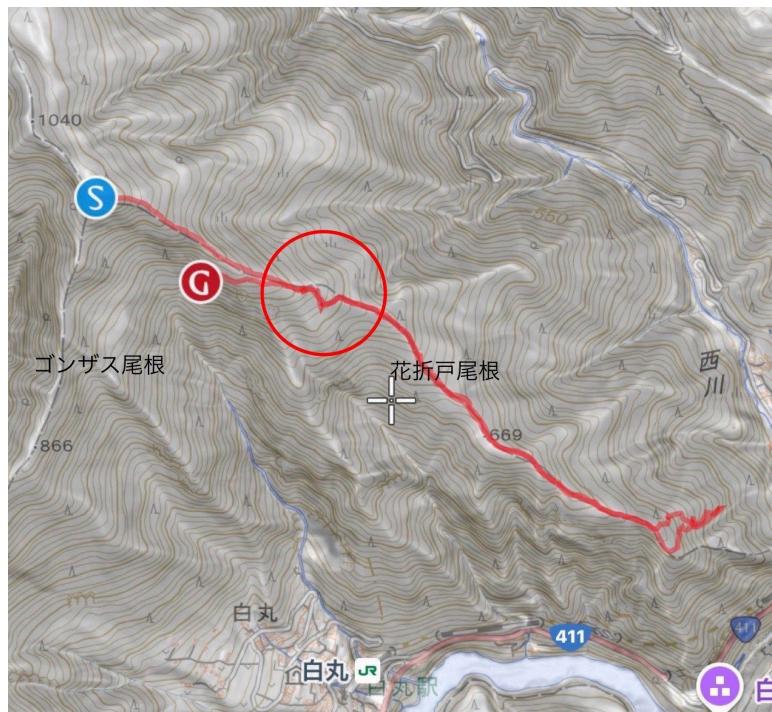
(図⑦ 道迷い地点1拡大図-2)



(図⑧ その現場写真)

4-4: 花折戸尾根道迷い地点 2

- ・花折戸尾根の登山道に戻り約1.5km登り返した後、花折戸尾根の西側にそれで(赤丸部分)再び道迷いしたと思われます。



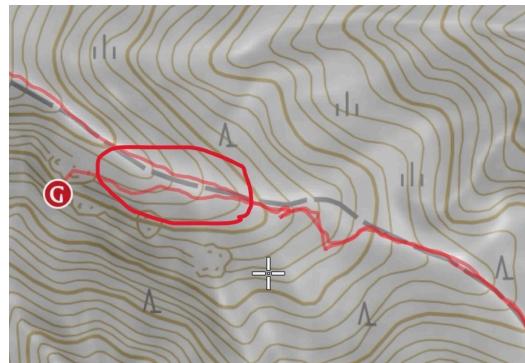
(図⑨ GPXデータ記録全体図:花折戸尾根での道迷い地点2)

- ・迷い込んだ西側尾根には鹿ネットが張り巡らされており、先へと進めないようになっている為、鹿ネット沿いに登り返している事が分かります。
- ・図⑩の黄色マーカー部分が鹿ネットです。鹿ネットに沿って図⑪の赤矢印のように進んだと推測されます。

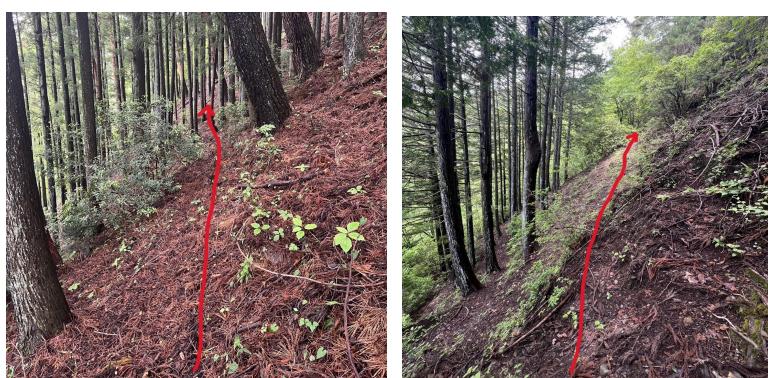


(図⑩ ⑪道迷い地点2の鹿ネット)

- ・図⑫の拡大図を見ると、鹿ネットを登り返した後、登山道には合流せず花折戸尾根西側のトラバースできそうな細いトレイルに迷い込んでいることが分かります。



(図⑫ 道迷い地点2拡大図)

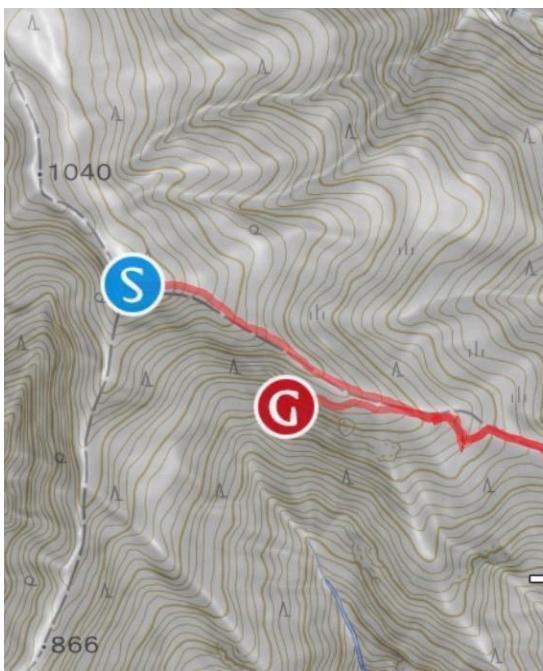


(図⑬⑭その現場写真)

- ・図⑫のGに向かう細いトレイルを進んでいたことが予想されます。※登山道は破線
- ・図⑬⑭の赤矢印が進んだと推測されるルートです。

4-5:GPXデータが途切れたG地点

- ・GPXデータは最終的に、G地点で急斜面に向かう軌跡を残して途切れしており、この周辺でフラスク、キャップ、アームカバーなどの携行品が発見されました。



(図⑮ GPXデータ最終G地点拡大図)

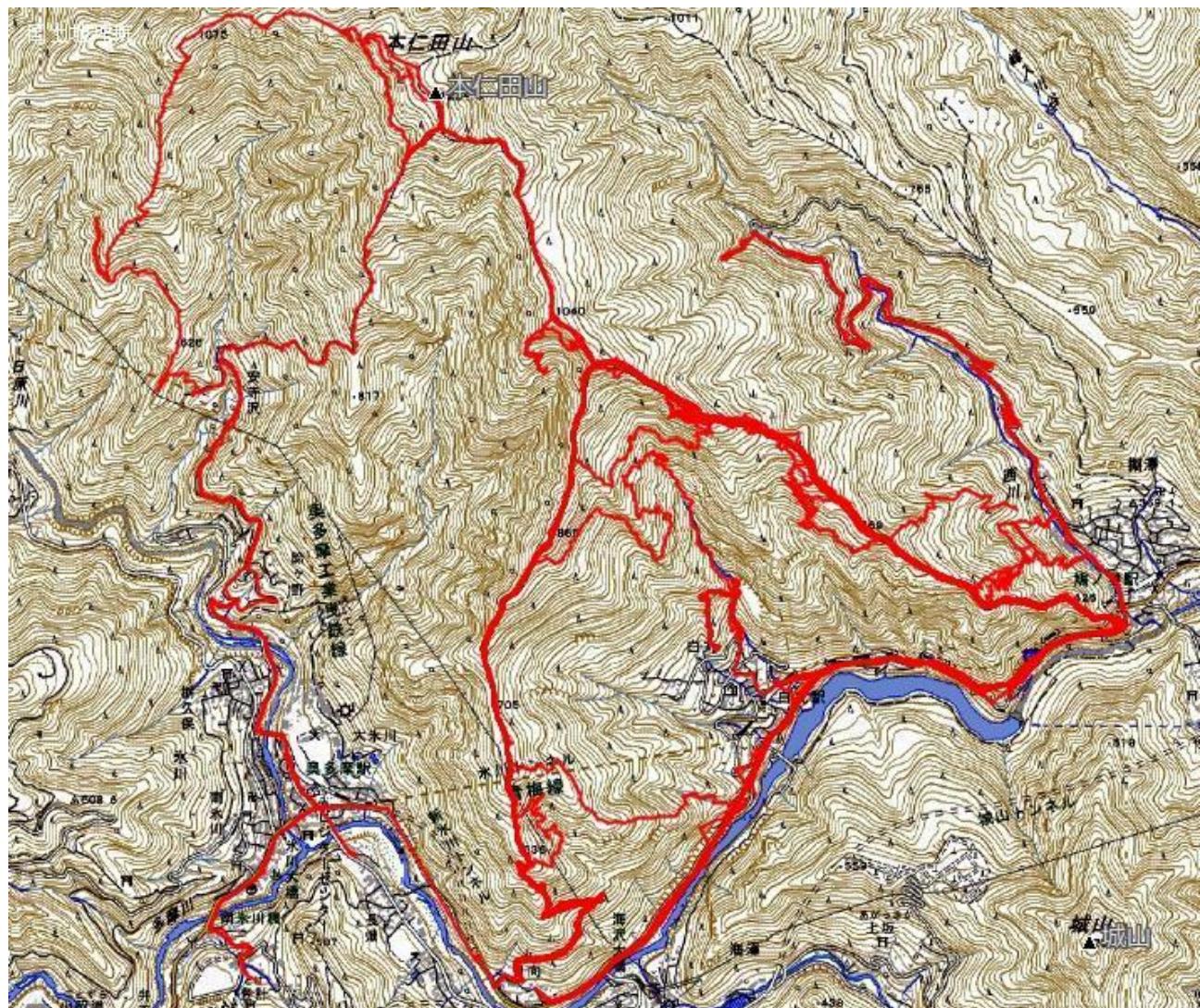
4-6:GPXデータが途切れた後

- ・GPXデータが途切れたあと再度サイクリングモードで時計を立ち上げていることが確認されており、その場から再度行動を開始した可能性もあります。
また、立ち上げた後の行動データまでは取得できておりません。

4-7:現場検証まとめ

- ・提供されたGPXデータを参考にし、私はデータに沿って現場で確認を行いました。これまでの現場写真はその時に撮影したものです。
- ・GPXデータの軌跡は実際に歩いたルートと多少のずれが生じている可能性もありますが、このデータを参考に検索しました。
- ・検索範囲は、遭難が発生したとされる花折戸尾根周辺を起点に、東側と西側、ゴンザス尾根の東側と西側、さらには白丸駅より北側の沢周辺、そして本仁田山周辺といった山域に及びます。

・私と協力者の方々捜索した軌跡を統合した図を示します。警察や民間救助隊、ボランティアの方々の捜索範囲は除外しています。



(図⑯ 捜索時の軌跡統合図)

5. 安全管理体制の課題と再発防止策

今回の重大な事故の結果を厳粛に受け止め、主催者として二度とこのような出来事を繰り返さないため、当日の運営体制や判断について深く反省し、安全管理上の課題と具体的な再発防止策を以下に整理いたしました。

なお、練習会の主催活動は無期限で休止しており、現時点で再開の予定はございません。再開する予定がなくとも、この出来事を深く受け止め、どうあるべきかを考えておくことは、主催者としての責任の一つだと考えています。

5-1 課題点

1 装備品の確認不足と重要性認識の差

- 参加者による装備品(ヘッドライト、防寒具など)の確認不足や、その重要性に対する認識に個人差があった可能性。
- 出発前の装備チェックが主催者側からの一方的な指示に留まり、相互確認や厳格な最終確認の仕組みが不足していたこと。
- モバイルバッテリーの携行が必需品として提示されていなかった点。

2 位置情報把握体制の不備とエスケープ基準の欠如

- 練習会中の参加者全員の位置情報を把握する仕組みが確立されていなかったこと。
- 参加者の携帯電話の電池残量低下に対する予防策や、その状況を把握する体制の不足。
- コース変更や、危険を察知した際のエスケープ(計画中止・下山)に関する明確な基準が策定されていなかったこと。

3 スタッフ配置と役割の課題

- スタッフの配置、特に参加者全体の状況を継続的に監視する最後尾担当の常時配置が不十分であったこと。
- 緊急時におけるスタッフ間の連絡手段や、迅速な情報共有体制が不十分であったこと。

4 緊急時対応やナビゲーション機器の使い方の説明不足

- 緊急時の具体的な対応手順や連絡手段について、事前の共有・徹底が不足していたこと。
- GPSデバイスのナビゲーション機能の正しい使い方や、道迷い時の原則(その場から動かない等)に関する説明が不十分であったこと。

5 緊急時の連絡体制と初動対応

- 事故発生時のスタッフ間の情報連携、外部機関(警察・消防)へ通報までの時間、および初期段階での情報提供の効率性に関する課題。

6 山岳保険加入確認の不足

- チーム加入規約の中で参加者に対し山岳保険への加入を促してはいたものの、練習会参加時点での加入状況について、事前の厳密な確認を行っていなかったこと。

5-2 再発防止策

1. 運営体制の抜本的見直し

・スタッフの増員と役割分担の明確化

参加者数に限らず、最後尾に必ずスタッフを配置し、常にスタッフが連絡を取り合い、参加者全員の位置情報を把握できる体制を構築する。

・リスクマネジメントの厳格化

スタッフに遭難対策、危機管理マネジメントについての資料を配布し、意識と技術の向上を徹底する。

2. 参加者への情報提供と指導の強化

・事前説明の徹底

ルートの難易度、危険箇所、リスク要因(天候急変、道迷いなど)に関する詳細な説明を事前のリマインダーメールと出発前のブリーフィングで徹底する。

・必携装備のチェック方法の厳格化

事前に提示した必携装備(レインジャケット上下、ヘッドライト、エマージェンシーキットなど)に加え、モバイルバッテリーを必携装備に追加する。

また、出発前ブリーフィングにて参加者同士で相互に装備品を確認し、ヘッドライト、GPXデバイスなどの動作確認や配布したGPXデータ反映の確認を行う仕組みを導入し、装備品の携行を徹底する。

万が一、必携装備を忘れた場合は原則として参加をお断りするが、状況によっては貸し出しによって対応することも検討する。

・道迷い対策の強化

参加者へのGPXデバイスの使用方法指導(コースデータ入力、現在地確認、軌跡記録)、迷った際の行動原則(動かない、沢に降りないなど)の情報共有を徹底する。

3. 参加者全員の位置情報とバッテリー残量の把握

・ヤマレコの位置情報共有サービスの導入

参加者全員の位置情報を常に取得し、スタッフで共有できる体制を整えます。

同時に、各参加者のスマートフォンの電池残量を定期的に確認し、残量低下時には注意喚起や対策を行う。ヤマレコは位置共有機能を使った場合電力消費が大きいので、バッテリー残量管理を徹底します。

4.ルート選定とリスクマネジメントの厳格化

・ルートの再評価と危険箇所の特定

今回の事故発生箇所を含め、過去に道迷いや事故が起こりやすいとされている箇所を除外する。コース設定時に破線ルートを除外する。

・コース変更基準の厳格化

やむを得ずコース変更を行う場合は、安全性が高く見通しの良い林道や舗装路を中心としたルートに限定する。

・エスケープ基準の明確化

参加者の疲労、天候の悪化、スケジュールの遅延など、安全な続行が困難と判断した場合は、躊躇なく計画を中止し、事前に定めたエスケープルートで下山する。

5.参加者の技量確認の徹底

・事前アンケートによるレベルの詳細な把握

事前のアンケートやヒアリングによる参加者の経験・体力レベルのより詳細な把握をし、それに応じた適切な練習会への案内を徹底する。

6. 山岳保険加入の義務化と確認

・保険適応期間の申告と加入状況の把握

参加条件として、遭難捜索費用が補償される山岳保険への加入を必須とし、申込時に保険証券の写し等を提出してもらい、有効期間内であることを確認する。

6. ご遺族の皆様へ

この度は、私が主催いたしました練習会において、このような痛ましい遭難事故を発生させてしまい、心より深くお悔やみ申し上げます。

ご遺族の皆様が今、いかばかりの悲しみとご心痛の中にいらっしゃるかと思うと、胸が締め付けられる思いでございます。

この度の事故が発生したことに対し、主催者として、事の重大さを改めて痛感しております。

これまでの捜索活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございました。

今後、ご遺族の皆様がこの困難な時期を乗り越えられるよう、微力ながらも寄り添い、支えとなることを誓います。

私は、この悲しい出来事を決して忘れることなく、二度とこのような事故が起こらないよう、安全管理の徹底に努めていくことを改めてお約束いたします。

この度は、誠に申し訳ございませんでした。

7. 情報公開について

本報告書は、今回の事故の事実と、主催者として策定した再発防止への誓いを公に表明するものです。

公開に際し、ご遺族の皆様の意向を最大限尊重し、プライバシーの保護を最優先いたしました。報告書内に、ご遺族の意向に反する個人情報や、特定の状況を推測させる記述は一切含んでおりません。

本報告書は、任意団体「奥多摩捜索支援会」のウェブサイトにて公開いたします。

私は、今回の事故を重く受け止め、ご遺族の皆様への真摯な対応と、二度と悲劇を繰り返さないため誠心誠意努めてまいる所存です。

トレイルランニング練習会で発生した遭難事故について
最終事故報告書 令和7年12月7日発行 発行者 塙 翔太